

大東文化大学

語学教育研究所所報

No. 40号 2017年3月

平成28年度活動報告	1 研究発表会要旨	5-9
平成28年 語学教育研究所運営委員 及び研究員	2 講演会要旨	9-10
研究員研究分野の紹介	2-3 研究員刊行物紹介	11-15
平成28年度講演会・研究発表会	3-4 刊行物についてのお知らせ	16
	原稿募集要項『語学教育研究論叢 34号』	17-18

2016年（平成28年）度活動報告

語学教育研究所所長 田口 悦男

大東文化大学語学教育研究所は外国語学部附置の言語学、応用言語学、文化、そして文学研究など多岐分野にまたがる研究機関です。その活動としては、多彩な学問分野の講演会、研究所研究員の研究活動・発表、そして本学の外国語教育への貢献など、語学教育研究所は幅広い役割を担っております。本年度も皆様のご協力をおもちまして予定された事業を無事終えることができました。心よりお礼申し上げます。任期中に気づいた点が2つほどあり、今後の課題として検討いただければ幸いです。1つ目は講演会の開催についてですが、5つの言語分野主催の講演会に参加して思ったことは、もっと多くの学生に聴いてもらおうとよいのではないかとということでした。それぞれの言語専攻の学生のために大変面白い講演会を企画・開催しており、専攻以外の学生さんにとっても興味のある内容であると思えました。EUの中心をなすフランス・ドイツ、イギリス・アメリカ・オーストラリアなど英語を母語とする国々、アジアの大国である中国、そして日本と、それぞれの言語を専門とする先生方が中心となって外国語学部の学生が「世界を見る目」を養うような講演会があれば素晴らしいのでは？という思いを強くしました。2つ目は語学教育研究所が刊行する『語学教育研究論叢』と『語学教育フォーラム』の差別化です。予算の関係から現在はどちらも論集の形態となりました。『語学教育フォーラム』は、以前は企画テーマの論文集や博士論文のような大部の単体論文の発表の場であったのですが、執筆希望者の増加により単体論文での刊行が難しくなっています。

最近、ヨーロッパの難民を巡る問題、地球温暖化対策、経済問題など世界各地で難しい問題が山積していますが、このような時代だからこそ、言葉や文化の異なる人々の間に理解や信頼を醸成する試みが大切だと考えます。言語、言語教育や文化研究の発展に本研究所がますます貢献できるよう、今後とも皆様のご支援・ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

2016 年度 語学教育研究所運営委員及び研究員

2016 年度語学教育研究所運営委員

所長	田口 悦男	外国語学部日本語学科
研究部会長	原瀬 隆司	外国語学部中国語学科
学部長	大島 吉郎	外国語学部中国語学科
学科主任	山口 直人	外国語学部中国語学科
学科主任	静 哲人	外国語学部英語学科
学科主任	中道 知子	外国語学部日本語学科
研究科委員長	大月 実	外国語学部英語学科
委員	安藤 好恵	外国語学部中国語学科
委員	ゲーブリエル・リー	外国語学部英語学科
委員	須崎 文明	外国語学部英語学科
委員	フランソワ・ルーセル	外国語学部英語学科
委員	藏中 しのぶ	外国語学部日本語学科

2016 年度語学教育研究所研究員

部会長	原瀬 隆司	外国語学部中国語学科
研究員	岡部 謙治	外国語学部中国語学科
研究員	ロバート・シグラー	外国語学部英語学科
研究員	ジェフリー・ジョンソン	外国語学部英語学科
研究員	小野寺 賢一	外国語学部英語学科
研究員	中村 隆之	外国語学部英語学科
研究員	須田 義治	外国語学部日本語学科

客員研究員

氏 名： 呂 浩

所 属： 上海交通大学人文学院 副教授

期 間： 2015年7月10日～2016年7月9日

研究分野：漢字史、辞書史、漢字域外伝播

研究員分野の紹介

氏 名： 原瀬 隆司

所 属： 外国語学部中国語学科

研究テーマ：中国語方言、蘇州語アクセントの類型研究、琉球と蘇州浙江との交流研究

氏 名： 岡部 謙治

所 属： 外国語学部中国語学科

研究テーマ：中国語学、中国語発音教育

氏 名： ロバート・シグラー

所 属： 外国語学部英語学科

研究テーマ：Corpus Linguistics, Variation and change in contemporary English, Sociolinguistics

氏名：ジェフリー・ジョンソン

所属：外国語学部英語学科

研究テーマ：Poetics contributing to a global poetic, and poetics of the American Edgar Allan Poe whose poetry profoundly influenced the French Symbolists and a great deal of poetry after symbolism

氏名：小野寺 賢一

所属：外国語学部英語学科

研究テーマ：ドイツ文学・思想のテキスト分析・解釈

氏名：中村 隆之

所属：外国語学部中国語学科

研究テーマ：カリブ海地域を中心としたフランス語圏文学・文化研究

氏名：須田 義治

所属：外国語学部日本語学科

研究テーマ：現代日本語のアスペクト論

研究発表会

日時：平成28年6月20日

発表者：中村 隆之（外国語学部英語学科）

題目：「マルティニック 島県立文書館およびシェルシェール図書館所蔵のカリブ海文芸誌について」

日時：平成28年6月20日

発表者：原瀬 隆司（外国語学部中国語学科）

題目：「蘇州方言における ABB 型形容詞の連読変調について」

日時：平成28年10月17日

発表者：須田 義治（外国語学部日本語学科）

題目：「動作の継続を表す動詞の連体形のアスペクト」

日時：平成28年10月17日

発表者：田口 悦男（外国語学部日本語学科）

題目：「ウェブ型リーディング教材を活用した教授効果—予備的研究—」

日時：平成28年11月21日

発表者：小野寺 賢一（外国語学部英語学科）

題目：「フリードリヒ・シラーの哀歌『散歩』とヴァルター・ベンヤミンの「遊歩」の概念について」

日 時：平成 28 年 12 月 19 日
発表者：岡部 謙治（外国語学部中国語学科）
題目： 「日中「ぎなた読み」考」

日 時：平成 27 年 12 月 19 日
発表者：ロバート・シグレー（外国語学部英語学科）
題目： “The Problem of Repeated Text in Corpus Construction”

日 時：平成 28 年 12 月 19 日
発表者：ジェフリー・ジョンソン（外国語学部英語学科）
題目： “Minstrelsy in American Culture”

講演会

日 時：平成 28 年 10 月 20 日
講演者：トリストラン・ブルネ氏（白百合女子大学専任講師）
演 題：「日本という鏡 ―アニメから見る日仏文化比較―」

日 時：平成 28 年 11 月 3 日
第 2 回講演会は、大東文化大学大学院日本語文化学専攻主催のシンポジウムを語学教育研究所が共催し、第 8 回「東西文化の融合」国際シンポジウム「傀儡子と観相（人相占い）の東西 海外の大学生・大学院生に対する日本語教育」というテーマで開催いたしました。

日 時：平成 28 年 11 月 7 日
講演者：ハビック真由香氏（MH International Education（株）代表取締役）
演 題：「学習者の心に届く英語絵本読み聞かせの実践」

日 時：平成 28 年 11 月 19 日
第 4 回講演会は、大東文化大学大学院中国言語文化学専攻主催の第 12 回学術シンポジウムを語学教育研究所が共催し、「中国語教育と日中翻訳」というテーマで開催いたしました。

日 時：平成 29 年 1 月 12 日
講演者：鎌田タベア氏（日独協会） & 柳原伸洋氏（東海大学）
演 題： 「ドイツの当たり前は、日本の当たり前？ ―日常生活からサブカルチャーまで―」

<研究発表会要旨>

(平成 28 年 6 月 20 日)

マルティニック 島県立文書館およびシェルシェール図書館所蔵のカリブ海文芸誌について

中村 隆之

昨年度から科学研究費の個人研究課題「20世紀フランス語圏カリブ海文芸誌の研究」に取り組んでいることから、2015年度の本研究所における報告は、この主題を取りあげた。今年度は、昨年度の報告「20世紀フランス語圏カリブ海文芸誌の研究の現状と課題——『アコマ』誌を事例に」を受けて、2016年3月に実施したフランス海外県マルティニック島における文献調査の一端を紹介した。

本報告で取りあげたのは、マルティニック 島県立図書館およびシェルシェール図書館に所蔵するカリブ海文芸誌である。調査をおこなうさいのし、調査方法、デジタルカメラを用いて収集した資料を解説した。

収集した資料として本報告で扱ったのは、年代順に以下である。『黒人学生』第1号(1930年代、コピー)、『マルティニック学生』(1930年代)、『トロピック』初版(1940年代)、『オリゾン・カライブ(カリブ海の水平線)』(1950年代)、『グリフ・アン・テ(大地に爪を立てる)』(1970年代)である。これらの資料をどのように本研究に活かすかは今後の課題である。

今回の資料収集をつうじてマルティニックでの調査の有用性のみならず課題も見えたことは収穫である。すなわちマルティニックでは、上記の資料をふくめ、雑誌は完本では揃っておらず、欠号があることや、資料の保管状態に問題があること(特にマイクロフィルム)もまた明らかになった。20世紀のカリブ海の文芸誌を調査・収集する場合でも、現地よりもフランスの機関でより充実した仕方で所蔵されている可能性があるため、今後はフランスでも調べてみる必要がある。

最後に、昨年度から継続して研究している『アコマ』について、この雑誌に縁のある「マルティニック学院」(グリッサンが1967年に開校した私営の高校にして研究所)を訪問したさいの調査内容を簡単に紹介した。

<研究発表会要旨>

(平成 28 年 6 月 20 日)

蘇州方言における ABB 型形容詞の連読変調について

原瀬 隆司

ABB 型形容詞は、3音節からなり、「形容詞+擬態語」の構造をもち、1形態素を構成する。発表者は、これまでに、蘇州方言の3音節からなる複合語における連読変調について調査、分析し、蘇州方言の3音節単語には、一定のアクセント素を形成するものが広く存在し、またそのピッチ・コンタワーからそれらにはいくつかのタイプがあることを指摘してきた。

今回の発表ではこれをふまえて、3音節で構成される ABB 型という第2音節と第3音節が同一単字で構成される形態素における連読変調のタイプを検討し報告した。

そして、こうした特殊な形式をもつ形容詞においても、その連読変調のタイプが上にあげた一般的な、3音節からなる複合語における連読変調のタイプに帰納できることを検証した。

研究発表には、音声分析機器により分析した音声の分析図像とインフォーマントの音声を用いて行った。

<研究発表会要旨>

(平成 28 年 10 月 17 日)

動作の継続を表す動詞の連体形のアスペクト

須田 義治

連体形の動詞は、シテイルの形をとれば(「歩いている人」)、動作の描写という叙述的な意味になり、スルの形をとれば(「(前を)歩く人」)、特徴づけという規定的な意味となる(が強まる)と言える。これは、変化動詞において、シテイル形が使われれば、(結果的な)状態の描写という叙述的な意味となり(「にごっている水」)、シタ形が使われれば、その状態による特徴づけという規定的な意味となる(「にごった水」)のと並行的である。しかし、全体的に見れば、シテイルの形が使われることは、スルの形と比べて、それほど多くはない。これには、小説における文体的な特徴も関係しているが、その根底には、歴史的な問題とともに、連体という文の構文論的な機能による文法的な意味の圧縮(未展開)といったものがあると考えられる。

<研究発表会要旨>

(平成 28 年 10 月 17 日)

ウェブ型リーディング教材を活用した教授効果—予備的研究—

田口 悦男

科研費により開発した Web R²は外国語の読みの流暢さを発達させるウェブ型プログラムである。音声とテキストさえあれば、インターネット環境を利用した、どのような言語にも使用できる学習プログラムである。現在は英語多読教材を搭載しており、これを試験運用した教授効果について報告した。プログラムの不具合等の修正が遅れ、前期での運用開始が6月にずれ込み、正味4週間ほどのデータ収集であったため、データ数が7名分のデータであった。

15セッションを1ST STAGE (1-5セッション)、2ND STAGE (6-10セッション)、3RD STAGE (11-15セッション)の3つのステージに区切り、1分間の語数(WPM)の変化を見ると、(1)初回の黙読において緩やかにWPMは上昇している(101wpmから130wpmまでおよそ30wpmの伸びがあった)、(2)4回目の黙読においてもWPMはさらに上昇している(141wpmから178wpmまでおよそ35wpmの伸びがあった)。

理解度については、(1)初回の黙読において緩やかに理解度は上昇している(45%から60%までおよそ15%の伸びがあった)、(2)4回目の黙読においてもWPMはさらに上昇していた(65%から75%まで、およそ10%の伸びがあった)、(3)各セッション内においては、繰り返し読むことで理解度は15%から20%上昇していた。

さらに、7名の協力者を初回黙読の理解度により2つのグループに分け、理解度下位グループ(4名、60%以下、 $M=37.89$, $SD=7.65$)と理解度上位グループ(3名、60%以上、 $M=73.11$, $SD=16.83$)の発達パターンを比較した。その結果、WPMの伸長度においては、(1)理解度下位グループでは初回の黙読速度については、全体としてWPMの伸びは初回と4回目の黙読いずれでも大きかった、(2)上位グループは初回の黙読速度は着実に伸びて、理想的な向上パターンをしめしている。4回目の伸びが少ないことから、4回まで繰り返し読む必要はないと思われる。

また、理解度の伸長度においては、(1)下位グループでは初回の黙読における理解度は30%から40%と15回のセッションを経ても伸びは鈍かった。しかし、4回の繰り返して3RD STAGEでは60%の理解度に達している、(2)上位グループは初回の黙読において、1ST STAGE(60%)から3RD STAGE(85%)と理解度が着実に伸

びて、理想的な向上パターンを示している。4回目の理解度においては90%から98%と、ほぼ完全に理解しており、伸びしろは大きくないが、正確に理解するための繰り返しとなっている。プログラムの不具合やデータ収集の期間が短かったため、十分なサンプル数の、信頼できるデータが収集できなかったが、今後の研究展開へつながる興味深い結果が得られた。

<研究発表会要旨>

(平成27年11月16日)

フリードリヒ・シラーの哀歌『散歩』とヴァルター・ベンヤミンの「遊歩」の概念について

小野寺 賢一

フリッツ・ロイター(1810-1874)は日本ではあまり一般的に知られていないドイツの作家である。しかし彼の作品は19世紀末までに2000万部以上が出版されたほど、ドイツでは一世を風靡した作家であった。

フリッツ・ロイターは北ドイツメックレンブルクのStavenhagenの市長の息子として生まれ、13歳までは主として家で周囲の大人達によって教育された。その後ギムナジウムを経て、親の意による法学を学ぶためロストック大、イエーナ大へと進学した。当時のイエーナ大は1817年のウィーン体制下の自由主義・国民主義に端を発するブルシェンシャフト(ドイツ学生同盟)の中心的存在となっていた。そこで彼は感化され過激な学生政治運動へと走った。これが原因で23歳の時Stavenhagenへの帰郷途上で逮捕され、死刑の判決を受けた。以後7年間投獄された。親が政治家であったこともあり、各方面への働きもあって、30歳で特赦により釈放された。

再度勉学の道を目指しハイデルベルク大に入学するも上手くゆかず、紆余曲折の後アイゼナハに移住し農業をしたり、家庭教師をしたりして生活をする。その地の牧師の娘ルイーゼ・クンツェ(Luise Kuntze)と結婚してやっと生活が安定した。

その後53歳で作家活動を始め、63歳で死去するまでわずか11年間の作家活動であった。1949年には死後75年を記念して、生誕の地Stavenhagenの町の名称がReuterstadt-Stavenhagenと変更され、2010年には生誕200年祭も祝われた。現在では低地ドイツ語最高の詩人との評価を得ている。いわば人生の前半は落ちこぼれ、後半は名誉の人。この点に焦点をあて、この作家を紹介しながら、その幼年期の生活環境について考えた事を報告した。

<研究発表会要旨>

(平成28年12月19日)

日中「ぎなた読み」考

岡部 謙治

昨年の定例研究発表会で、12月に「日本人中国語朗読のリズム教育」について発表した。

今年度発表は、昨年のテーマに関連して、センテンス内(或いは連語内)における誤読(意味分拍の取り違い)によって生じる「意味の異同」について述べるものである。

別宮氏の『日本語のリズム 四拍子文化論』にいう「意味分拍と音数分拍の取り違い」に学びつつ、日本語「ぎなた読み」と、中国語センテンス(或いは連語)内の意味分拍の読み間違いを対照、紹介し、中国語朗読トレーニングに役立つ具体例を挙げている。

<研究発表会要旨>

(平成 28 年 12 月 19 日)

The problem of repeated text in corpus construction

ロバート・シグレー

When a corpus is compiled from online sources using retrievals of search terms, the same text may be retrieved multiple times (either from multiple retrievals from the same web address, and/or retrievals of multiple copies across different web addresses).

The problem also arises in approaches not using search terms, when sampling types of language use that naturally re-use text.

Online news sources, in particular, re-use text across different sites, at different times on the same site, and even within the same article.

For a large corpus, we need some way of identifying duplicated text automatically, so that we can remove exact duplicate articles and so minimise bias; but it is less clear what we should do with smaller units of repeated text. This presentation (i) classifies different types of repetition arising in online news, as seen in the first draft of a corpus currently being compiled from such sources (Tamang 2016); (ii) attempts to quantify the problem using AntConc's cluster search feature to aid identification and removal of duplicate text; and (iii) suggests ways of minimising the problem.

<研究発表会要旨>

(平成 28 年 12 月 19 日)

Minstrelsy in American Culture

ジェフリー・ジョンソン

Professor Jeffrey Johnson's Goken research presentation was an exploration of the relationship between the minstrel tradition and American popular music. The argument was specifically concerned with making connections between elements of minstrelsy and American music in the 1930s and 1970s.

The presentation of this research started with a chronological etymology of the term minstrel in its Latin, French and English usages. The connection of the term minstrel to the court jester was pointed out as a pivotal development. The final definition presented was "minstrel show" which was the point of departure for connections to 1930s jazz, in particular Al Jolson in blackface, Louis Armstrong, as a black man doing a blackface derived act, and Cab Callaway, a far more modern looking and sounding African-American musical act. Except Calloway these acts included elements of dance and music as derived or at least influenced by minstrel shows from the 1840s.

Subsequently, minstrelsy adapted itself to television variety shows and cartoons which were briefly touched upon in Dr. Johnson's presentation, and in particular the introduction to American audiences of British musical groups such as the Beatles. This research closed with the 1970s tour by Bob Dylan called Rolling Thunder Review wherein Dylan was in whiteface, as an ironic inversion of blackface. To emphasize the point one of the main songs on the tour was "Hurricane" about Rubin Carter, a black middle weight boxer who was framed for a murder. The situation served as the metaphorical lynching of a black man, still

quite common vigilante extralegal practice in the 1940s and into the 1950s.

The potential tragedy inherent in minstrelsy and its racist foundations have the silver lining of minstrelsy opening the doors of professional entertainment to many African Americans.

<講演会要旨>

(平成 28 年 10 月 20 日)

日本という鏡 アニメから見る日仏文化比較

トリスタン・ブルネ氏

トリスタン・ブルネ氏は、1976 年にフランスに生まれ、日本史の研究者である一方、日本のアニメやサブカルチャーに造詣が深く、『北斗の拳』をはじめ、日本のマンガの翻訳家でもある。子どもの頃にフランスで日本のアニメを観て育ち、自らを「アニメ・オタク」と称するブルネさんに、フランスで日本のアニメやサブカルチャーがどのように受け入れられていったのか、そしてフランスと日本の文化の違いについてわかりやすく解説していただいた。

フランスで開催される「ジャパンエキスポ」は 2013 年には 24 万人が集う一大イベントとなり、フランスはヨーロッパ随一の「オタク大国」であることは日本でもよく知られている。しかし、フランスが日本のオタク文化を受け入れてきたプロセスには紆余曲折があった。

1970 年代半ばに始まった 2 つの国営放送の視聴率争いから、当時安価であった日本のアニメがフランスで急速に子供たちの人気を獲得していったが、若者の間で人気が拡大するにつれて、フランス文化の独自性を損なうという危機感が生まれ、また日本アニメの暴力描写の多さや質の低さが問題となり、放映中止となってしまった。

しかし、テレビから消えてしまった日本アニメはフランスの若者たちに、日本アニメに魅了されている自分に気づかせ、それまではテレビで見るものであった日本アニメやマンガは買って見るものとなり、受け身だったアニメファンは能動的な消費者となった。こうして、積極的なファンはファン同士のつながりを求め、彼らが主催するイベントが各地で開催されるようになり、コスプレが普及するなど、フランスでの日本アニメの人気が再燃し、「ジャパンエキスポ」の開催へとつながっていった。

日本アニメの魅力は共感性であるという。正義と悪の戦いを描くロボットアニメでも、悪役は単純な悪役ではなく、時には視聴者が自分の心を投影することができる存在として描かれている。フランス人は個人主義であり、自由と権利を大変重視する一方で、自分たちの自由を阻むものを敵と見なす。日本アニメは敵味方の関係なく、登場人物への共感性を大事にする日本文化を体現している。それとは気づかないまま自分の文化とは異なる価値観に触れ、自分たちの価値観を再考するような体験を与えてくれる日本のアニメから世界の多面性を教えられたという。

(文責 田口悦男)

<講演会要旨>

(平成 29 年 11 月 7 日)

学習者の心に届く英語絵本読み聞かせの実践

ハビック真由香氏

第 3 回講演会は「学習者の心に届く英語絵本読み聞かせの実践」と題して、ハビック真由香先生 (MH International Education (株) 代表取締役) に、英語の絵本を使った読み聞かせを通して、優れた英語教育の指導法を実演していただいた。幼い子供たちは面白くないものには関心を示さないため、指導者には子供たちの興味や驚きに訴えて効果的な指導を行うスキルが求められる。絵本の物語を理解し、楽しむことはもちろんのこと、英語の発音や表現を学ぶことにも活用できる絵本の魅力に触れる貴重な機会であった。ハビック先生の圧倒的なパフォーマンスにより、いつの間にか学生たちは絵本の世界に引き込まれていた。

(文責 田口悦男)

<講演会要旨>

(平成 29 年 1 月 12 日)

「日本の当たり前はドイツの当たり前?—日常生活からサブカルチャーまで—」

柳原伸洋氏 (東海大学講師) 鎌田タベア氏 (日独協会)

本講演会では、東海大学講師の柳原伸洋氏とドイツ出身で現在日独協会に務める鎌田タベア氏をお招きし、おもにドイツの日常生活についてお話しいただいた。

まず、ドイツの人口や面積などに関する基礎的なことについて説明があった。これは講演全体の前提知識となり、学生の理解を助ける効果があった。その後、講演者は世に溢れる「ステレオタイプ」としてのドイツを紹介し、それと現実のドイツとを比較した。たとえば、ビールやパン、ソーセージといった食べ物について、クイズ形式で聴講生に問いを投げかけたうえで、これらの食べ物や飲み物が実際にドイツでどのように消費されているのかについて説明があった。

次に、「住まい」、「行事」、「仕事」、「経済」、「政治」、「スポーツ」など、学生の関心を広くカバーするテーマに基づき、その実情について解説が行われた。そこには、日本人とは異なるドイツ人の労働観や生活感覚について、聴講生に素朴な問いを投げかけ、全員でともに考えていく、というプロセスがみられた。聴講生にとってこうした作業は、ドイツへの関心の第一歩あるいは自国の文化・生活・政治を考えなおすヒントになったのではないだろうか。

講演の最後では、「ドイツ語の響き」からドイツ語学習へと導く試みがなされた。講演者によれば、このメソッドは「楽しみ」をきっかけにして学習意欲を高めるために開発したものだという。これも、ドイツ語履修者でなければふだんはあまり接することのない言語 (ドイツ語) を知ってもらいよききっかけとなったと思われる。

「文化」と「言葉」について考えることは、大東文化大学語学研究所の重要な使命である。本講義全体を通じて、参加学生はドイツの社会や文化についての基礎的な知識を楽しみながら習得し、学習への意欲を大いにかき立てられたものと思われる。



『エドゥアール・グリッサン 〈全-世界〉のヴィジョン』（岩波書店、2016）

中村隆之（外国語学部英語学科）

エドゥアール・グリッサン（1928-2011）をご存知でしょうか。カリブ海マルティニック島に生まれた、フランス語圏を代表する作家です。グリッサンは、難解な作家の部類に入ります。詩のみならず、小説も難しい。その意味では玄人受けをする作家だといえそうです。

本書は、グリッサンの文学的営みに接近し、作家の全体像を描こうとする試みです。

「彼の「黒い肌」と、彼の書くものとのあいだには何か関係があるのか。出身地であるマルティニックとはいったいどのような島なのか。彼の母語はフランス語なのだろうか。どのような作家に影響を受けたのか。そもそも、なぜ書くのか」。こうした問いに取り組むために、本書は書かれました。

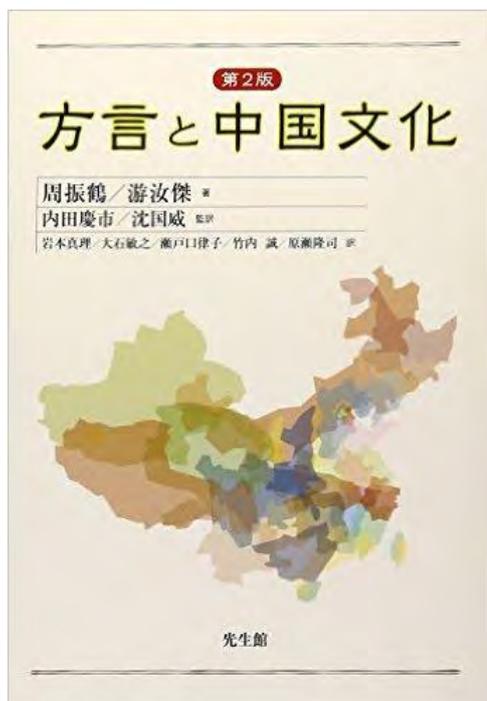
副題にあるとおり、本書は〈全-世界〉(Tout-monde) という語をキーワードに据えています。この語は作家が晩年にみずからの世界観を示すものとしてしばしば用いたものです。〈全-世界〉というヴィジョンに近づいてみるのが、上記の問いを解く鍵にもなります。

本書を書くときに最初にイメージしたのは、旅です。グリッサンは、自分たちの先祖が横断した大西洋に思いを馳せ、自分たち「プランテーションの民」がアフリカからの切断から生まれたと考えます。その起源はアフリカではなく奴隷船の船底に求められます。根源的な暴力から生じたこのプランテーションの民の大航海、その「帰還なき旅」を、グリッサンは「開かれた船の旅」と呼びます。私は、本書を、この「開かれた船の旅」のイメージから、どうしても始めたいと思いました。つまり、この本を読むことじたいが、プランテーションの民が形成され（奴隷制時代）、自分たちの世界が消失したのちに（奴隷制廃止後から海外県時代）、〈全-世界〉に向けて当てどない彷徨を始める（現在）、グリッサンの描くカリブ海の人々の数世紀の歩みを辿る旅となることを願いました。私にとって、グリッサンの文学的営みを辿り直すということは、カリブ海の民の歴史的経験を想像上で追体験することでもあるのです。

グリッサンが形作る風景のうちには、海があり、山があり、森があり、町があります。起伏に富んだその風景は、どの経路を辿るかによってその都度変わった様相を見せます。「読むことは旅すること」（ル・クレジオ）だと信じています。

『方言と中国文化』2015年10月発行、光生館（東京）

原瀬 隆司



本書は、周振鶴、游汝傑両氏による『方言与中国文化』（第2版）2006年、上海人民出版社の翻訳である。

周振鶴氏は現在、復旦大学中国歴史地理研究所の教授であり、専門は歴史地理学である。游汝傑氏は、長年にわたり復旦大学中文系の教授をつとめられた言語学者で、専門は中国方言学である。

原著の初版は、1986年10月に上海人民出版社から出版された。今から30年も前に公刊されたものである。初版発行後、1996年に一度改訂がなされたが、改訂は初版本の誤植・誤字などの若干の訂正にとどまり、全体の構成と基本的内容は旧版と変わっていない。そのため著者も述べているように、この30年間になされた新しい研究成果は原著には盛り込めていないし、また中国語方言の方言区分についても、内容が古いままであるという欠点がある。

しかし、この著書の学界における画期的な研究成果は全く色あせてはいない。

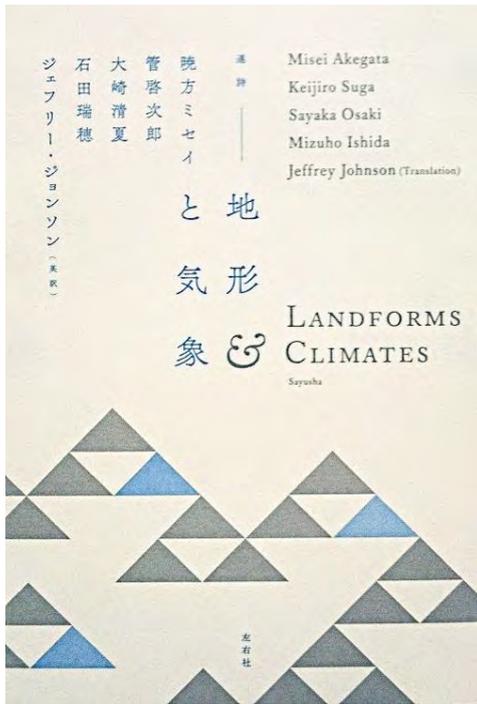
方言研究に関しては、今日からさかのぼること2千年前の漢成帝（BC32-BC7）の時代、黄門侍郎の官職にあった揚雄は『輶軒使者絶代語釈別国方言』（略称、『方言』）を著し、当時の中国各地の口語語彙を採録し方言比較語彙集を作成して、漢代方言地理の様相を明らかにした。漢代方言の全貌は反映されてないが、中国語研究の貴重な資料となっている。

こうした資料が数多く存在する中で、これまで中国の言語学研究は、伝統的に経学の付属物としての「小学」にはじまり、音韻・訓詁・文字の3つの部門からなり、研究の範囲は書きことばに限られ、経学を解釈するためだけに目的があった。

こうした中国語研究の流れのなか、原著は、文化的要因によって引き起こされると考えられる、言語の分化・融合・交替というマクロ的な変化を考察すると同時に、同じく文化的要因に起因すると考えられる、言語・方言の中の音声の変化・語彙の変化・文法構造の変化というミクロ的な変化を考察する方法で、人の移動・移民、人文地理、歴史的方言地理、栽培植物、地名、芝居・小説、民俗、文化接触の各文化領域にわたって、上述した『方言』に代表される歴史的著書や各種方言調査報告あるいは著者自身によるフィールドワークを通じて、中国の言語・方言を通時的、共時的に解明した。

また、方言を中国文化史の研究と一体化するという画期的な研究方法を用いて、方言の形成と発展の文化的背景を明らかにした。

本書の出版にこぎつけるまでには、長い時間をついやしたし、また、多くの方々の懇切なご教示とご指導をいただいた。訳出にあたり、最も痛感したのは方言学が言語学以外の人文科学と関連付けることがいかに困難で、労力を要するものであるか、ということであった。



Landforms & Climates. Misei Akegata, Keijiro Suga, Sayaka Ozaki, Mizuho Ishida. Translated by Jeffrey Johnson. Tokyo: Sayusha, 2016.

Landforms and Climates is the product of a one-year collaboration of four contemporary Japanese poets: Misei Akegata, Keijiro Suga, Sayaka Ozaki, and Mizuho Ishida. They invited me from the start to be their translator. Kotaro Totsuji of Sayusha Publishing posted the new sonnets and translations on their website at an average of one per week over 52 weeks. As is stated in the opening of *Landforms and Climates*, these sonnet-*renshi* hybrid poems follow rules

inspired by the renga master Sogi, in particular *Minasesangin*, and devised by Sayaka Ozaki, the poet-director of the project. The rules are: poems should be in sonnet form, include an environmental description, link from the last line to the first line across stanzas, and should be written with an awareness of the 5 and 7 morae rhythm of Japanese tradition.

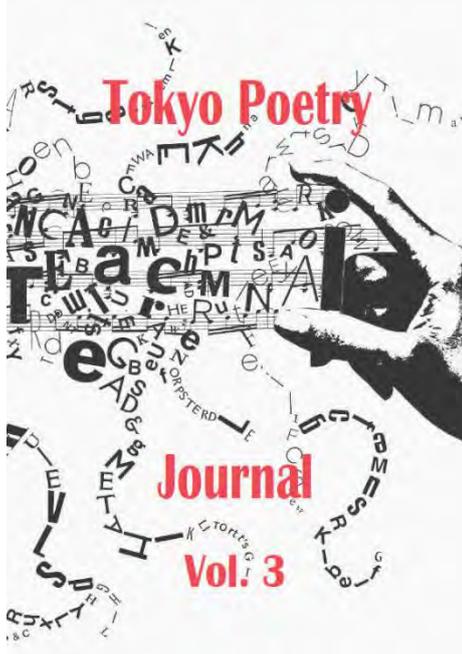
Landforms and Climates thematically engages the growing contemporary concern in literature and in the world at large with our planet’s environmental changes, or as some in eco-criticism call it: the “Anthropocene,” this epoch when human activity has greatly impacted climate and threatens our co-inhabitants of the Earth as well as humanity itself. However, as Sayaka Ozaki says in the afterward, these poets face the impending disaster of our own destruction with “wordplay—[*Landforms and Climates* is] a carefree work of cheerful ecstasy.” Or as it is expressed in the final line of one verse herein, “the halo at the end of life.”

At the same time, these poets are inveterate travelers and references to various locales around the world abound, cultural references, descriptions of diverse landscapes and a smattering of other languages help form an additional geological-literary layer to this poetry collection, that of the eco-travelogue. The Afterward mentions actual trips taken by the poets during the composition: Tibet, the U.S., Paris, Laos and Lithuania. But the verses engage more far flung locations: Lhasa, Lisbon, Guatemala, Vietnam, Argentina, the Matterhorn and the Shandong Valley to mention a few. It also makes mention of perhaps the most legendary of travelers: Magellan.

Among the verses there are those that manifest spatial and temporal flows, the rivers and oceans of time in their ebb and flow, if you will. They offer diverse voices and perspectives of “unpeopled” swaths of land, “contours of

transparent blue” space, a “ghost ship” sailing on dream-time waters. Animals and their perceptions include a kingfisher stalking fish, the quetzal coloring this world with its presence, the perceptions of plants and the voice of humidity.

As translator I faithfully kept my nose to the ground of the special language being conjured by all four of these poets. I doggedly ignored whose composition I was working on at any given moment but followed each individual scent in the hope that I would form no preconceptions but sniff out and track each new linguistic texture in an entirely new encounter. I am not sure I was up to the task, but I thoroughly enjoyed the process and am proud to offer up this result. When we reached the end I think I can say we all felt spent—that it took all we had and left us ecstatic with a tinge of sadness. It is an impressive work of poetry.



Daito Bunka University's Professor Jeffrey Johnson, along with retired Professor Barbara Yates, are the founding editors of the *Tokyo Poetry Journal*. This biannual Journal has published three volumes to date, and Volume 4 is underway. The most recently published, Volume 3, was conceived of and largely edited by Professor Johnson, and is highly innovative in a number of respects. The conception of the volume is the confluence of poetry and music and to that end the theme of music permeates Volume 3. The cover design (as well as illustrations in the volume) is an artistic interpretation of a musical score by artist Andrew Topel.

The opening article is Trane DeVore's tribute to his father's fusion of music and poetry spanning from the 1960s to the 1990s. That is followed by Dr. Johnson's interview with Morgan Fisher, long time Tokyo resident who had a number one hit in England at the age of 17 years old and went on to play keyboards in numerous bands including Mott the Hoople and Queen.

The prose pieces are followed by a section of poetry, most of it with musical accompaniment and composed by local poets, Marcellus Nealy, Jeffrey Johnson, Jerry Gordon, another editor of the Journal, Jordan Y.A. Smith, and the fourth editor, Taylor Mignon. There are also songs in this section by Irish musician David Brennan and the Australian who hosts poetry and song open mic nights at Bar Garigari, Sorcha Chisholm. One element of the innovativeness of this volume is technical, most of the poems in this section have musical accompaniment and those poems and the songs have QR codes beside them so that one can hear the poems and songs performed by linking through the QR code. As far as we know this is truly innovative and QR codes have not been employed in this fashion before.

The next section is a visual art section with musical themes. The first artist is Ray Craig, whose art work combines illustration with verbal text that is done in Sex Pistols or ransom note style and appeared in a publication entitled "Kiss Me Series". Next is Kit Nagamura who juxtaposes English haiku to photography. She is a contributor to the Japan Times as well as a haikuist appearing on NHK. Next is Toshihiko Shimizu who was a Fluxus artist and his prints included here have profound musical connections. Shimizu is followed by more work by Topel, and that is followed by another section of poetry.

This section of poetry is not necessarily musically themed but some have musical topics. Poems by Cherise Fong, Barbara Summerhawk (Yates), Joan Anderson, Paul Hullah who is a musician/poet, John Francis Cross, and Aram Saroyan are followed by poems in Japanese by Kitasono Katué with John Solt's translations.

The next section is a poetic interaction/exchange with the avant-garde group Fluxus. Taylor Mignon and Jordan Smith conceived of and organized the Fluxus interaction which includes work by Genpei Akasegawa, Ay-O, Toshi Ichiyangi, Takehisa Kosugi, Yoko Ono, Mieko Shiomi, Hi Red Center, and interaction/participation by Joy Waller, Barbara Summerhawk, Jeffrey Johnson, Jordan Smith, Yosuke Tanaka, Michelle Naka Pierce are the interlocutors.

Volume 3 closes with an interview with Samm Bennett, a prolific singer songwriter, and virtuoso musician who plays in numerous bands doing various musical styles and genres as well as playing solo in many venues around the Tokyo area and is also a host at Bar Garigari's open mic.

刊行物についてのお知らせ

『語学教育研究論叢』第34号（平成29年3月）

『語学教育フォーラム』第31号（平成29年3月）

『語学教育研究所所報』No. 40（平成29年3月，Web版のみ）

原稿募集要項

語学教育研究論叢第34号

語学教育研究所所長 田口 悦男

論叢編集委員長 須田 義治

平成28年5月10日

下記の通り原稿を募集します。奮って御執筆くださるようお願い致します。

内 容： 言語研究・語学教育に関する論文（書評、研究ノート、資料等も可とする）。
文学作品等を対象とする言語学・文献学等の方法を駆使した研究も含む。

資 格： 1. 本学外国語学部専任教員（客員教員、特任教員、助教を含む）
2. 本学外国語学部非常勤教員
3. 共同研究の場合は第一執筆者が該当者であること
4. 客員研究員、外国人特別研究員
5. 本学大学院外国語学研究科博士課程後期課程に在籍の学生（推薦書が必要）
6. その他編集委員会が適格者として認めたもの（推薦書を必要とする場合もある）
※ 応募論文多数の場合は上記番号順に優先権を有する。

投稿申込：平成28年5月10日（火）から平成28年6月24日（金）15:00迄に、

(1) 執筆申込書 (2) 大東文化大学機関リポジトリ登録・公開許諾書 を、
板橋校舎1号館1階外国語学部事務室宛に提出する。（※郵送の場合は6月24日（金）必着）

所定の用紙：執筆申込及び原稿提出の際に必要な以下の所定の書類は、語学教育研究所のHPに掲載する
執筆申込書、大東文化大学機関リポジトリ登録・公開許諾書、指導教員推薦
書

原稿提出締切：平成28年9月23日（金曜日）15:00迄

※郵送の場合は書留郵便にすること（上記期日までに必着）

原稿と一緒に提出するもの

- (1) CD-R（またはUSBメモリ）に保存したファイル
- (2) 指導教員の推薦書（大学院後期課程の学生のみ）

投稿規程：

1. ワープロ原稿とする。横書き全角36字・28行、A4用紙20枚とする（図版・レジュメを含む）。欧文の場合は半角66字・28行、A4用紙20枚以内とする。
1ページあたりの文字数・行数等の規定を遵守せず、最終的に20ページを超えてしまった場合には、掲載をお断りする。
2. 未発表の完成された原稿であること。

3. 本文以外の言語のレジューメを論文の前に付すこと。欧文のレジューメの場合もそれに準ずる。(日本語、中国語は400字以内、欧文は300語以内)
4. 論文の題目は日本語及び中国語原稿には欧文、欧文原稿には日本語を付記する。
5. 欧文タイトルの書式は、編集委員会に一任すること。
6. 印刷所等は語学教育研究所に一任すること。
7. 抜刷り贈呈は30部とする。増刷分については個人負担とし、執筆申込書に増刷部数を明記する。
8. 提出された原稿の審査による採否及び、ジャンルの特定は一切編集委員会に任せること。
9. 母語でない言語での論文は必ず、事前にネイティブ・チェックを受けること。

校 正：著者による校正は二校までとし、紙での校正を原則とする。内容、ヘッダー及びページ番号など、関連付随事項に関して、著者の責任において校正のこと。各校正の提出期限までに未提出の場合は、掲載を見合わせる場合がある。新規加筆は認められない。

発行日：平成29年3月発行予定

原稿提出先：大東文化大学外国語学部事務室

〒175-8571東京都板橋区高島平1-9-1 (Tel: 03-5399-7329)

問い合わせ先：語学教育研究論叢 編集委員長 須田 義治

大東文化大学語学教育研究所所報 No. 40 ウェブ版

2017年3月末日

編集発行 大東文化大学語学教育研究所

〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1

TEL 03(5399)7329 大東文化大学外国語学部事務室